

ART PAPER

130

NAGOYA CITY ART MUSEUM NEWS

2025 AUTUMN

名古屋市美術館ニュース アートペーパー

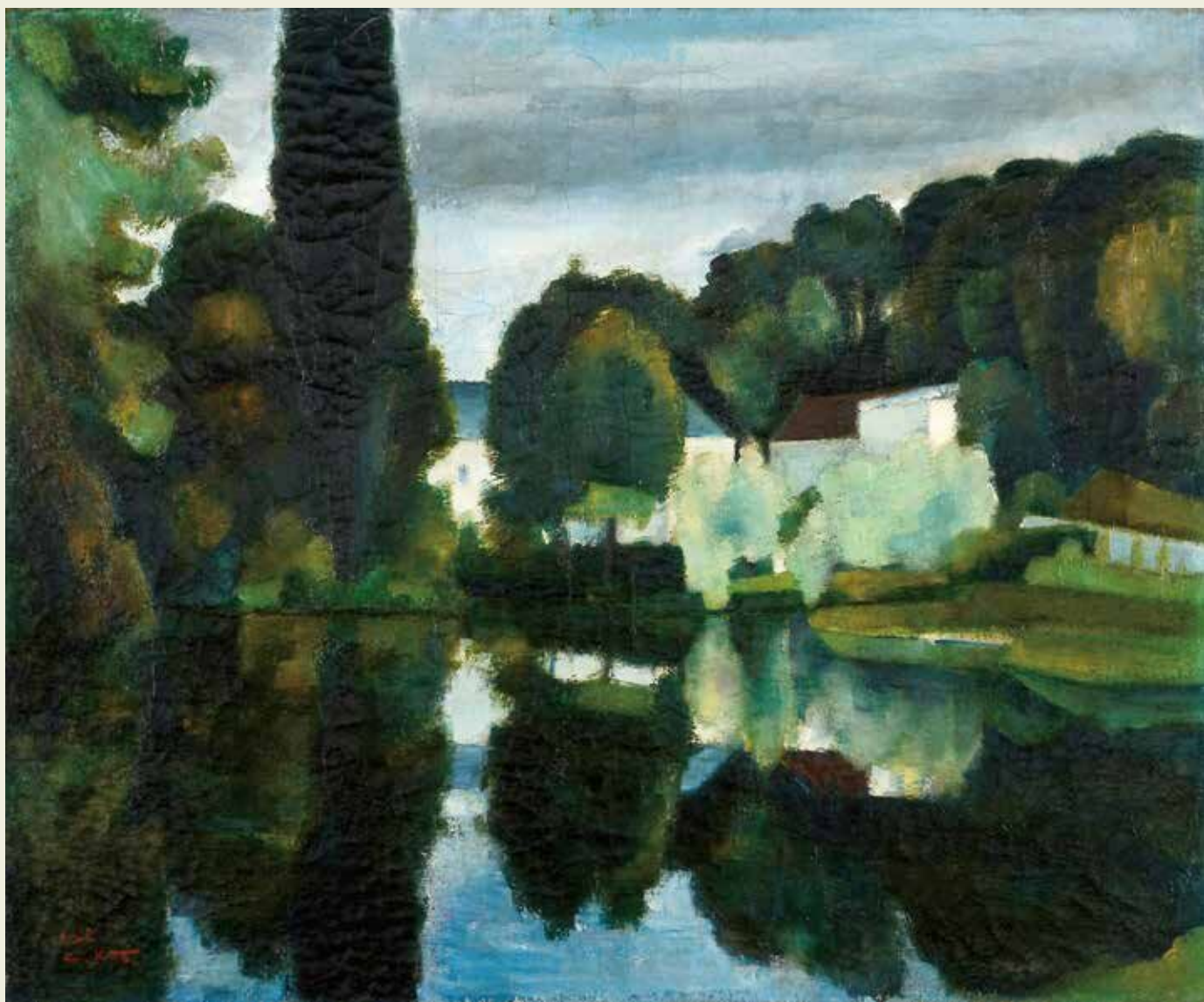
特集 鬼頭甕二郎の新収蔵作品について

TALK BACK「舟越桂《かたい布はときどき話す》」 ARTIST「アントニー・ゴームリー(1950-)」

展覧会現在進行形「コレクション×現代美術 名古屋市美術館をめぐる4つの対話」

EVENT「博物館実習」 COLUMN「スマートフォンに学芸員」

REVIEW「国際芸術祭「あいち2025」」「没後90年 橋本平八展」



鬼頭甕二郎《モラン河畔》1926年 油彩・キャンヴァス 60.0×73.0cm 北條(旧姓・鬼頭)文緒旧蔵

発行 名古屋市美術館
名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜・白川公園内)
TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005
<https://art-museum.city.nagoya.jp/>
休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始
開館時間 午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

執筆 井口智子(I.)、久保田舞美(mm)、近藤将人(コ)、松井美保(M)、清家三智(3)、福岡優里(Yu)、森本陽香(haru)、山田真央香(山)
デザイン 岡田和奈佳
印刷 鬼頭印刷株式会社
発行日 2025年12月1日



Nagoya City Art Museum

特集 鬼頭薺二郎の新収蔵作品について

令和6年度、名古屋市美術館は鬼頭薺二郎(1897-1952)の油彩画3点をご寄贈いただきました。この年に鬼頭の作品がまとまって収蔵されたのは、今思えば小さな奇跡の連続で、またとないご縁に恵まれた1年でした。

はじめは、長く当館に寄託されていた1点を常設展に出品するために行った作品調査でした。当館には、収蔵作品1点、寄託作品1点の計2点の鬼頭作品がありました。ちょうどその頃、収蔵作品である《風景》(1925年)は、春陽会の歴史をテーマにした特別展に貸し出し中で、館内には寄託の1点が残るのみでした。これを機に、長く寄託いただいている《[風景]》(1924年 図1)をよくよく調べてみようと思い、寄託者(所蔵者)の許可を得て、作品をすみずみまで調べました。画面右下に赤字で「Kito 1924」のサインがあるので、フランス留学中(1923-28年)の作品であることは分かっていましたが、正確なタイトルや制作地については、詳しく分かっていませんでした。キャンヴァス裏面に何か書き込みがあればと期待しましたが、残念ながら手がかりは何も見つかりませんでした。しかしながら、所蔵者の方からは、「これを機に美術館に寄贈したい」とありがたいお申し出をいただき、受託から受贈へと切り替わることになりました。鬼頭の作品は、戦火でその大部分が焼失したため、残された作品点数が極めて少ないことで知られています。その貴重な1点を収蔵できることは、鬼頭の調査研究にとって大きな一歩でした。しかしながら、鬼頭は著作権が消滅して久しかったことも影響してか、親族との交信が途絶えていたため、調査研究が思うように進まない状況に変わりはありませんでした。

そんな折、美術館にかかってきた一本の電話から、思いがけず事態が進展することになります。東京在住の鬼頭の親族の方から、作品寄贈のお申し出をいただいたのです。調査を進める手がかりを探していたタイミングだったので、その電話はまさに奇跡のように思えました。電話口でのお話によると、親

族の方々の自宅には、両親や祖父母から受け継いだ作品が保存されているとのこと。新たに作品が発見される可能性は非常に低いと考えていたのですが、この知らせに驚くとともに、ぜひ拝見したいという思いが高まりました。

所蔵者の皆様のご協力を得て、実際に作品を拝見し、収集候補作品を選定するための調査が始まりました。思いのほか多くの作品が保存されていることが分かり、複数の所蔵者のもとで、30点以上の作品を実見することができました。収集するとなると、作品を1〜2点程度に絞り込む必要がありますが、調査研究の側面からは、できるだけ多くの作品を見ることが、実例の蓄積として役立ちます。スケッチ風の板絵から20号程度の大きなキャンヴァス作品まで、戦前から戦後にかけて制作された様々な作品が残っていました。検討を重ね、その中から、戦前の作である2点を収蔵させていただくこととなりました。

《モラン河畔》

1926年 油彩・キャンヴァス 60.0×73.0cm 北條(旧姓・鬼頭)文緒旧蔵(表紙)

本作品は、薺二郎から弟・仁三郎^[1]に贈られたもので、仁三郎の長女で英文学者の北條文緒氏^[2]が父の思い出とともに長く大切に保管してきた作品でした。今回実見した作品の中では最もサイズが大きく、堂々とした風景画で、水面に映る河畔の家々を繊細な緑の濃淡で表した良作です。画面左下には、赤字で「1926 K. Kito」とサインがあり、フランス留学中の作品であることがわかります。

キャンヴァス裏面には、薺二郎本人が書いたと思われるフランス語のメッセージが残されており、この作品についての重要な情報を教えてくださいました(図2)。

書き込みの「M. KiTo」は、おそらく「Monsieur. Kito」の略であると思われます。1931年に仁三郎に本作品を贈ったということでしょう。括弧書きには「クイイの風景」とあるように、フランス中北部セーヌ＝エ＝マルヌ県のクイイ(Couilly)を訪問した時に制作したようです。制作地を補強するもう一つの手がかりとして、裏面の木枠に貼り付けられた古い紙切れがありました。一部欠損しているものの、「4 氏名 鬼頭薺 画題 モラン」の文字を確認できました。「モラン」とは、クイイ地域を流れるグラン・モラン(Grand Morin)と呼ばれる河川の名称です。薺二郎が亡くなった際に開催された「故・鬼頭薺二郎遺作展」には、鬼頭家や親族が所蔵する作品が一堂に展示され、その目録には、「鬼頭仁三郎氏蔵」とされた作品のひとつに「モラン河畔」が含まれていました。このことも、本作品がモラン河畔を描いたものであることを示す証拠となりました。

受贈時、画面全体に多数の亀裂や絵具の剥落が見られたため、令和7年度に修復(洗浄・補彩)を行ったことで、美しい画面がよみが



図1 《[風景]》1924年 油彩・キャンヴァス 50.0×60.8cm



図2

A MON FRERE ET AMI,
M. KiTo.
RECONNAISSANCE
ET
AMITIE.
K. Kito.
LE 11 MARS 1931
(Paysage a Couilly)

原文

兄弟であり友である
鬼頭様

感謝と友情をこめて

K. Kito
1931年3月11日
(クイイの風景)

和訳

えりました。長年の所蔵者であった故・北條文緒氏のエッセイ『ブルームズベリーふたたび』によると、父・仁三郎はヘビースモーカーであったため、作品の画面にタバコの脂がこびりついていて、仁三郎の死後、絵の表面を石鹸で洗ったところ、美しい緑色が現れたという逸話が残されています。^[3]

《三之浦朝景》

1937年頃 油彩・板 23.0×32.0cm

本作品は、甕二郎の末の弟・大智の家系に伝わる作品です。額の裏板に甕二郎の筆跡で「謹呈 清水徳太郎様 三之浦朝景 昭和十二年 鬼頭甕二郎」と書き込まれています。清水徳太郎^[4]は、大智の妻・登喜子の父で、何かの記念に甕二郎から徳太郎へ贈呈された作品のようです。徳太郎と妻・富の没後、作品は大智に引き継がれ、大智の没後、その長男へと引き継がれ、今日に至りました。

静岡県沼津市の三の浦地区を描いた小品で、朝靄でかすむ内浦湾の風景を情感豊かに表現しています。

甕二郎の没後、妻・利子らによって編集・発行された『甕二郎画文集』（東洋経済新聞社、1952年）には、「海」と題して、伊豆の三津へ出かけたときのことが記されています。フランスからの帰国後、生活の息苦しさを晴らすために海を眺めていたこと、三津でも静かな海を眺めて心の平穏を得たことなどがつづられており、その際に「画は出来なかった」とのことなので、本作品の制作時期とは異なる可能性が高いですが、伊豆の海に特別な思い出があったことは確かです。

先に紹介した2点と既存の収蔵作品はいずれも1920年代の作品でしたので、1930年代の制作と考えられる本作品が加わることで、年代のヴァリエーションを豊かにするとともに、画風の変化も見取れるようになりました。

受贈した3点以外にも、作品の状態などを考慮して受贈を断念せざるを得なかった

作品もありました。寄贈のご厚意すべてに応えられないもどかしさや申し訳なさを感じつつも、調査に対して全面的にご協力いただいた所蔵者の皆様には、感謝の気持ちでいっぱいです。郷土ゆかりの作家であり、1920年代にフランス留学している鬼頭の作品は、当館の収集方針の一つである「エコール・ド・パリの美術」においても、活躍が期待されます。名古屋市美術館では、寄贈いただいた作品を大切に活用し、今後も調査研究を続けていきたいと思います。（haru）

註

1. 鬼頭仁三郎(1900-47)は、イギリスの経済学者ジョン・メイナード・ケインズの著書『ケインズ貨幣論』を翻訳したことで知られる経済学者。
2. 北條文緒(1935-2023)は、鬼頭仁三郎の長女で、英文学者、作家、翻訳家、東京女子大学名誉教授。
3. 北條文緒『ブルームズベリーふたたび』、みすず書房、1998年、106頁。
4. 清水徳太郎(1882-1963)は富山県出身。鉄道院、内務省に勤務。1928年から衆議院議員(山形県選出)を務める。



図3 《三之浦朝景》1937年頃 油彩・板 23.0×32.0cm

舟越桂
《かたい布はときどき話す》

令和7年度名品コレクション展I・後期(2025年7月5日～9月7日)にて展示した際に皆様から寄せられた感想を紹介します。

大理石の瞳が光に照らされているようすが印象的で、展示エリアに入って早々に立ち止まってしまいました。楠のあたたかみのおかげか、会ったこともないのにどこかで会ったことのある人のように感じて不思議です。詳しいことはよく分かりませんが、この人がどうしてこんな表情をしているのか気になります。何か話したいことがあるなら聞いてあげたいと思います。
(いつき 27歳)

もう会うことができない誰かを待っているのか、忘れようとしているのか、冷たくても美しい瞳と、下半身がなくても立ちつくしている様子がうかびました。上半身だけでもこの人の気持ちが伝わって来るようでした。
(きのこ 48歳)

くびと目がすこしかたむいていておもしろいです。少しこわいかんじがして、「ときどき話す」そうなので、しゃべったらどんなことを言ったりするか、少しきになります。本当の人みたいにつくってあった、すごいなと思いました。おじいちゃんが、「作った人とそっくりだね」とっていたので、その人にあってみたいです。
(Ameku.Saya 8歳)

少し困り顔の男の人なのか？女の人なのか？じっと見てると、なんだか愛着が湧いてきました。
(ぼーちゃん 27歳)

はじめに見たときは少しゾッとして正直怖い印象でした。しかし、よく見みると困った表情にも見えて、「何を考えているのだろう?」とこちらが考えさせられるすてきな作品におもえてなりません。やることをたくさんかかえてしまって何から手をつけようかフリーズしている自分の姿にも似ていて、応援したくなってきました。
(令和のギャル曾根 26歳)

大理石で作られた瞳から目が離せなくなる。どれだけ見つめても視線は合わない。一方通行なようでも体からはあたたかみを感じる。不思議な感覚でした…。
(とまと 27歳)

「かたい布はときどき話す」という題名だったけれど、話しているところを想像できないほど、この作品を見ていると、緊張感を感じました。性別や、なにをしている状況なのかなど、色々なことがあいまいで、いろんな考え方が出来て、見ていて楽しかったです。
(独身女性 17歳)



舟越桂《かたい布はときどき話す》及び
《「かたい布はときどき話す」のためのドローイング》1988年(展示風景)

始めは心理的に隔たりを感じつつも、鑑賞するうちに、この人は何を考えているのだろうか？何を話すのだろうか？と想像したり、自分の姿と重ね合わせながら、作品との距離を縮めていく方が多かったようです。メッセージとともに、作品の絵を描いてくださった方もたくさんいらっしゃったのが印象的でした。(M)

ARTIST

アントニー・ゴームリー (1950-)

名古屋市美術館の周辺や白川公園内には、様々な彫刻作品が点在しています。これらはパブリックアートと呼ばれ、公共空間に設置された芸術作品のことを指します。そのなかでも美術館の南庭に伏せた人物の作品は、見たときに驚いた人も多いのではないのでしょうか。この作品は、イギリス出身の彫刻家であるアントニー・ゴームリーの《接近》です。

ゴームリーはケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジで考古学、人類学、美術史を学んだ後、薬剤師の父の影響を受けてインドなどの東洋世界に興味を抱きました。その後インドやスリランカに三年間留学し、仏教について学びました。この際に学んだ仏教の知識や考え方は、ゴームリーが作品を制作するときの軸となっています。1994年のターナー賞をはじめとして、国内外で多くの賞を受賞しています。2025年には芸術への貢献が認められ、イギリスの名誉あるコンパニオン・オブ・オナー勲章を授与されました。現在も新作を発

表したり、各国で展覧会を開いたりと精力的に活動している彫刻家で、日本国内でも多くの作品を見ることができます。

ゴームリーは1980年代から、自らの体を型取った人物像を多数制作しました。《接近》は、1983年から制作された《Hermetic Lead Bodycase Works》というシリーズの一つです。身体の特徴はゴームリーそのものですが、像に表情はなく、一般化された普遍的な人物像として存在しています。自身の身体を媒介として、人間の存在とその空間との関連性を我々に考えさせます。この作品では身体という内面と、周囲の空間という外面の緊張関係が生み出されています。しかし、人物像が伏せて手足を大きく広げていることで、人物像と大地という環境

との繋がりを感じとることができ、周囲の空間と調和しているようにも受け取ることができます。また、名古屋市の美術館の《接近》は、 casting時に型へ鉄を流し入れるための管の跡が、上部に四か所残っています。

美術館はもちろん、周辺の屋外彫刻にもぜひ足を運んでみてください。(Yu)



アントニー・ゴームリー《接近》1999年、名古屋市美術館所蔵

展覧会現在進行形

コレクション×現代美術

名古屋市美術館をめぐる4つの対話

2026年1月9日(金)ー3月8日(日)



本展は、愛知と接点を持ち、全国的に活躍している4人の作家が、当館のコレクションの中から作品を選び、それぞれの視点でコレクションを解釈し、自身の新作とともに展示空間を作ります。それぞれの展示プランが決まりつつありますが、ここでは、4人の作家について紹介します。

名古屋出身の斉と公平太さんは、「ARTくん」「オカザえもん」など、多くの人に響く作品を生み出しながら、「美術」を取り巻く制度を批判的に見つめます。本展に向けて、斉とさんは、モディリアーニ《おさげ髪の少女》に関する資料を大量に収集している模様。モディリアーニという作家と作品の関係、作品がどのように受容されてきたのかが浮き彫りになりそうです。富山県出身で、国際芸術祭「あいち2022」など愛知でも発表をおこなう田村友一郎さんは、様々な着想源から物語を構築し、映像やインスタレーションなどによって、現実とフィクションが交錯する世界を生み出します。美術館に訪れた田村さん、地下ロビーからずっと上を見つめています。さて、どんな物語が生まれるでしょうか…。長野県を拠点に愛知でも発表

表を行う蓮沼昌宏さんは、絵画やキノーラという装置など、さまざまな手法で、自身が見て、体感したことから生まれる物語を表現します。突然ですが、地下鉄桜通線名古屋駅で、高松次郎の長大な壁画があることをご存じでしょうか。高松次郎作品の再制作プロジェクトに関わった経験のある蓮沼さんの発案により、愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所と名古屋市美術館の共同研究として、本展開幕前に壁画《イメージスペース・名古屋駅の人々》の調査・清掃を行いました！愛知県出身の三瓶玲奈さんは、対象を見ること、モチーフを取り巻く環境や現象を絵画に定着させることについて深く思考しながら作品を制作します。人工物が起こす光の現象、自然が生み出す現象が美しい二人の所蔵品作家と、三瓶さんの作品が描く現象が交差する展示空間にご期待ください。

四者四様の対話を通して、皆さんの中にも対話が生まれることを楽しみにしています。(mm)

左上 斉と公平太《「モディリアーニのおさげ髪の少女」の模写》2025年(制作風景)、作家蔵

右上 田村友一郎《見えざる手》国際芸術祭「あいち2022」、常滑市、インスタレーション、2022年／ワールド・クラスルーム、森美術館、2023年

左下 蓮沼昌宏《カーテンが映る部屋》2025年、作家蔵

右下 三瓶玲奈《The Face》2025年、作家蔵 Courtesy of the artist and Yutaka Kikutake Gallery 撮影: Kenji Takahashi

EVENT

博物館実習

2025年8月21日(木)ー8月26日(火) ※8月24日(日)は休み

名古屋市美術館では令和6年度から博物館実習を開始し、今年度は6人の実習生を受け入れました。博物館実習とは学芸員資格取得を目指す学生が、博物館で実践的な体験をするものです。と言っても、なかなかイメージしづらいと思いますので、実際にどんな内容の実習を行っているか紹介したいと思います。右記がだまかなカリキュラムです。

5日間という短い期間ですが、名古屋市美術館の活動の概観が見えてくるようなカリキュラムを意識しています。1日目と2日目は、これまでで大学で学んだ内容を踏まえながら、名古屋市美術館の実際の業務とリンクさせていくかたちの座学実習を行います。合わせて、設備などを含めたバックヤード見学や、ボランティアの活動見学・体験など、美術館という場だからこそ経験できるカリキュラムも行います。3日目には夏休みの子供向けワークショップ(今年度は「美術をたのしむ

プログラム2025 フレスコってなに？コースターづくりにちょうせん！)に準備・片付けや進行の補助といったサポートスタッフとして参加してもらいます。

また、実習生には5日間を通して「名古屋市美術館の展示室1つを使った、コレクションによる展示プランの作成」という課題に取り組んでもらいます。課題学習では、実習生自身でテーマ設定から作品の選定、展示図面の作成まで行います。最終日には1人10分程度の発表を行い、学芸員総出でフィードバックを行います。課題学習には、これまでの実習の成果を発揮してもらうだけでなく、コレクションについて深く知って欲しいという意図もあります。

令和8年度の博物館実習の募集は、来年の2月ごろに開始する予定です。実習館を検討中の学生のみなさんと、名古屋市美術館での実習に興味のある方はぜひご応募ください。(コ)



作品取扱実習の様子

1日目	座学、バックヤード見学
2日目	常設展・特別展見学、ボランティア活動見学・体験、ワークショップ準備
3日目	ワークショップ参加(サポートスタッフ)
4日目	作品取扱実習、作品撮影実習
5日目	課題学習発表

カリキュラム

国際芸術祭「あいち2025」

2025年9月13日ー11月30日

愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、
瀬戸市のまちなか

6回目となる3年に一度の国際芸術祭が、これまでより時期を1か月以上遅らせて9月半ばから始まりました。本稿を執筆している10月時点でも日中は30度前後まで上がり、まちなか会場を歩くにはやや過酷な気候ですが、比較的空いている平日をねらって訪問しました。

開幕当初から「展示空間に余裕があり落ち着いて見られる」と評判は上々でしたが、先進的な美術表現に偏ることなく、当館所蔵の《東山動物園猛獣画廊壁画》や山本作兵衛の炭鉱画など、現代美術との結びつきが一見希薄に思える作品を現代の文脈で解きほぐし、新たな価値を多くの方に提示しようとする意図が感じられます。

そんな中、印象に残ったのは愛知県陶磁美術館の芝生広場で体験したクォン・ビョンジュンの『ゆっくり話して、そうすれば歌になるよ』というサウンド・インスタレーションです。装着するヘッドフォンから聴こえるのは、あらかじめ採集された瀬戸のまちや人々、土や水、火、植生など自然の風景から発せられる多種多様な音で、立体音響技術によって仮想空間に彫刻のごとく設置されています（もちろん見えません）。

体験者が見ている現実の風景の音とヘッドフォン

からの音は別物で、初めのうちは違和感が先に立つのですが、歩き回るうち付属のGPSが体験者のいる場所や向く方角を感知し、それぞれの場に設定された音があらわれます。聴き続けるうちに目の前の風景と音の風景とが次第にリンクし、芝生の匂いや全身に受ける風など五感で感じる要素も相まって、現実と仮想の境目がなくなっていく不思議な感覚を味わいました。

同じ装置を使いつつ、体験者がどの時間帯にどこを向き、どのルートを歩いたかによって個別の体験となる点は、同じ美術作品を見ている鑑賞者のどの視線に触れるかは十人十色で、感想も異なることと似ています。互いの見方、感じ方を尊重するため、何かを共有することは私たち人間にとって不可欠な行動なのだと、今回のテーマである「灰と薔薇のあいまに」を振り返りながら思いました。（3）



提供：国際芸術祭「あいち」組織委員会
Photo：Ryohei Tomita

没後90年 橋本平八展

2025年8月2日（土）ー10月13日（月祝）

三重県立美術館

日本近代彫刻史において、その名を刻み、38歳で急逝した橋本平八（1897-1935）の没後90年を記念した展覧会が、三重県立美術館で開催されました。《花園に遊ぶ天女》（写真）、《幼児表情》、《石に就て》といった代表作をはじめ、絵画やスケッチ、資料などにより橋本の創作のあゆみをたどり、その創作の源がどこにあり、何が彼に作品を生み出させたのか、そして、彫刻家という枠を超えた橋本の己の哲学への探求、創作への強い信念に迫る企画でした。

現在の伊勢市に生まれた橋本平八は、上京後に佐藤朝山に学び、25歳で日本美術院展に《猫》が初入選。若くしてその技量と才能が認められます。当時、上京した芸術家の多くが、東京を拠点に活動した時代に、橋本は29歳のときに故郷朝熊に戻ることを選択します。「神の都」と称した朝熊は、橋本にとって創作者としての自分を高め、哲学を追求する場所でした。謎めいた作品として知られる《石に就て》は、台座に乗る石を彫り出した作品。会場では、その「モデル」になった石とともに展示され、《石に就て》が単なる写しではなく、橋本と問答しているような感覚になる作品でした。《花園に遊ぶ天女》は、右手をそっと耳に添えて、まるで天のささやきを聴いているようなポーズ、そしてボ

リュームが抑えられた身体表現が強く記憶に残る作品です。当初あった背後の老樹は、この作品に満足してはいけなそうと思ひ、自ら破壊したと知り、橋本の創作への姿勢に圧倒される思いがしました。一方、友人の子どものために作った干支の作品もあり、中でも本人が「会心の作」といった、《白猪》は愛らしい、忘れられない一点です。地元では頒布会が組織され、会員は橋本から届けられる作品を気長に待ったといひます。

橋本の独創性に富んだ活動は、地元の自然、人々に支えられており、郷土の三重で回顧展が開催された意義は高く、今後さらに彫刻を越えた橋本の活動の調査が進み、伝えられていくことを期待させる展覧会でした。（1.）



橋本平八《花園に遊ぶ天女》1930年 東京藝術大学大学美術館蔵

スマートフォンに学芸員

これを読んでいる方で今手元にスマートフォンがある方はどれくらいいるでしょうか。2000年代後半に日本で発売されて以降、私たちの生活と深く結びつくようになったスマートフォン。誰もが当たり前持っている時代だからこそ、私たち美術館の活動もこの機械を使った対応が増えているように感じます。そこで、当館では昨年6月から導入しているスマートフォン向け展示ガイドアプリ、「ポケット学芸員」（開発元：早稲田システム開発株式会社）についてご紹介します。

「ポケット学芸員」は、スマートフォンやタブレットを利用してコレクションの解説を楽しむことができる無料のガイドアプリです。このアプリを一度ダウンロードすれば全国200館（R7.4.16現在）を超える美術館・博物館で使うことができるという優れたもの。日本語だけではなく英語や中国語といった多言語に対応していることや、音声・動画で解説を楽しめることも魅力のひとつでしょう。当館では代表的な作品はもちろん、黒川紀章の建築の見どころや屋外彫刻などを幅広く紹介しています。こちらを使うことで、いつも何気なく見ている作品や通り過ぎている場所にも、何か新しい発見があるかもしれません。

さてこちらの「ポケット学芸員」ですが、展示室にあるキャプションと同じように、ガイド内容はそれぞれの美術館・博物館の学芸員が自由に作成しています。当館では音声と文章で展開していますが、他館では面白い取り組みが行われているのをご存じでしょうか。例えば、展示ガイドのナレーションを地元高校の放送部をお願いしている館、手話の解説動画を配信し、ユニバーサルデザインに取り組んでいる館、さらにはゲームとコラボをした解説ガイドを配信している館など、その活用方法は様々です。それぞれの館による違いを見比べてみても面白いかもしれませんね。当館でも新しい取り組みができないか日々アンテナを張りながら過ごしております。この機会にぜひ活用してみたいかがでしょうか。（山）



案内パネルと
アプリ画面

アプリのダウンロードはこちら

<https://welcome.mapps.ne.jp/pocket/>



※展示室内でご利用の際は、他のお客様のご迷惑にならないようイヤホン等をご用意ください